

## 研 究 発 表

### 森鷗外・ドイツ留学最後の1年

Ōgai Mori: the last year of studying in Germany

坂 本 秀 次\*

From August 1884 to September 1888, Ōgai Rintaro Mori, the most prominent writer in modern Japanese literature, lived in Germany as a military doctor with the Japanese Imperial Army. In the free atmosphere of Leipzig, Dresden, and Munich he had a bright and cheerful life. But his life in Berlin, which he visited last, was darker.

At that time, Berlin was the capital of Germany, and Ōgai was thus burdened with the duties of public and private intercourse. He was especially under great strain when his superior, Tadanori Ishiguro, came to Munich to attend the 4th International Red Cross Conference as a representative of Japan.

In the light of the new literature available concerning the Ishiguro and Mori families, I would like to investigate the topic of "Ōgai Mori: the last year of his study in Germany," with particular attention to

(1) the relations between Ōgai and his fellow doctor

---

\* SAKAMOTO HIDEJI 〔現職〕 山梨学院大学助教授

Taniguchi, centered around Ishiguro

- (2) the actual circumstances of Ōgai's military duty in Germany
- (3) Ōgai's sweetheart (Rei no Hito) through the eyes of Sozan (Ishiguro's sweetheart).

はじめに

鷗外森林太郎は、陸軍衛生制度調査と軍陣衛生学研究を目的として明治17年(1884)8月から、21年(1888)9月まで、ドイツへ派遣されました。ライプチヒ、ドレスデン、ミュンヘンまでは、近代ドイツの自由な空気に触れて、明朗で快活な生活を送りましたが、なぜか、ベルリンでは、緊張と憂愁の漂う暗鬱を感じさせます。

(別紙 序ノ1)

ベルリンにおける森鷗外を論じた<sup>(註1)</sup>代表的研究および先行論文には、長谷川泉先生の「森鷗外論考」など5部作の名著があり、小堀桂一郎、竹盛天雄、磯貝英夫の諸氏の発表があります。今回は、「森鷗外・ドイツ留学最後の一年」と題して、森がベルリンで公私にわたり最も深くかかわった石黒忠恵との、来独から帰国まで、1. 石黒をめぐる森と谷口との関係、2. 森の隊附勤務の真相、3. 蒼山からみた森の愛人例之人の3点について、実証的に考察したいと思います。

差上げました別紙資料は時間の都合でご紹介できませんので、報告に従い適宜ご参照願います。

#### 1. 石黒をめぐる森と谷口との関係

「石黒渡来の密報至る」と、森は、石黒の来独を警戒して(20年)5月12日、『独逸日記』に書き留めました。噂の手紙は<sup>(註2)</sup>賀古鶴所だろうと穿った推理もありますが、『家書』を播く限り、森篤次郎が人伝に聞いて発信した日付不

明の書簡と思われます。

(別紙 1ノ1、1ノ2)

『家書』とは、『独逸日記』の「家書に接す」とある、森家の家族が在独の鷗外に宛てた手紙のことで、『独逸日記』には53回出てきます。現存の『家書』200通余りは、森鷗外<sup>(註3)</sup>記念館と日本近代文学館に分散収蔵されています。この『家書』は、未公開資料で、要旨の口頭発表しか許されませんので、多少ご不便とは存じますが、ご容赦下さい。

さて既に、密報以前、石黒から厳格な指示<sup>(註4)</sup>を受けていた森にとっては、穏やかではありません。噂が現実となり一番緊張したのは<sup>(註5)</sup>(20年)7月17日、夜11時、ベルリン駅頭で、同僚の谷口謙と待ち迎えた到着でした。人に知られた記録魔、石黒のベルリン滞在の様子は子孫の石黒孝次郎氏<sup>(註6)</sup>の「不円文庫」と慶応義塾大学医学情報センターの「石黒文庫」で詳細を知ることができます。たとえば、「不円文庫」の『石黒日乗』では、発掘された巻2から巻4までに、(20年)9月1日から翌年10月までを1日も欠かさず記録しています。連日「谷口来ル」、「谷口、森来ル」とあり、2人が朝晩競い合い奉仕するさまには涙ぐましさを感じます。また、「石黒文庫」の『在独通信』は、陸軍省宛58通のうち50通が現存しています。ベルリン到着第一報の7月21日付、第10回信は、早速、ベルリン在住の医学留学生12人をあげ、陸軍省から谷口、森、内務省から北里、文部省から加藤、佐藤(三吉)、私費留学生の佐藤(恒久)、片山、島田、坂田、武島、名倉、隈川の名前を記しています。それに言葉の通じない石黒が、谷口と森の通訳に助けられたと、軍医總監橋本綱常宛報告しています。

時に、石黒は、陸軍省医務局次長、軍医監で、橋本を補佐する立場にあり、森の直接の上司。しかも、日本陸軍の軍医制度を確立した人物です。さらに、日本近代医学創設者の1人で、かつて、東京帝国大学総長心得、つまり、副学長を兼ねたことがある、官界と学界に顔のきいたボスでした。来独の目的は、20年秋、カルルスルーエで開かれる第4回赤十字国際会議と、続くウィー

ンの万国衛生デモクラフィー第6回会議に、日本代表委員として出席すること、それに、ドイツ陸軍の医学衛生施設や制度の視察と調査でした。

話は少し遡りますが、17年、森がドイツ留学の年に、日本陸軍の首脳は、欧州先進国を視察して帰りました。一員の橋本は、特に、国際的な赤十字社運動の必要を痛感して、政府に建議し、翌年、アジアで最初の加盟国となりました。同時に、陸軍ではドイツ語に通じた谷口が抜擢され、西洋赤十字社の事情調査を命じられました。その詳細は、18年8月4日、陸軍軍医学会での、谷口の発表を、『東京医事新誌』が報じています。

(別紙 1ノ3)

谷口は、橋本の信頼を得ると共に一躍、赤十字社の消息通となりました。石黒が来独にあたり既に、留学中の谷口を誰よりも優先して重用した理由には、こういう事情がありました。

やがて、橋本は、20年6月22日、日本赤十字社監督を兼任しました。

さて、石黒はベルリン到着後、直ちに、第10回信から第14回信まで矢継ぎ早に、ドイツ陸軍の見聞を詳細に書き送りましたが、間もなく開かれる赤十字国際会議には谷口を派遣する予定と報告しました。決定的になったのは、8月20日付、第14回信で、正式文書として谷口一等軍医派遣申請書を、陸軍大臣伯爵大山巖宛と軍医総監橋本綱常宛、2通同封して送りました。ところが、突如、石黒は、8月27日付第15回信で、コーレルの勧告によりカルスルーエに谷口と森を出張させたいと書きました。

森にとっては、全く思いがけない幸運に恵まれました。その結果、2人の活躍で、石黒らの日本代表が国際会議に面目を施した話はご存知のとおりです。

この時釈然としなかったのは谷口でした。特命の事情調査の知識を傾け、会議に万全を期していた谷口が、<sup>うま</sup>旨みを森に攫われたからです。『<sup>(註8)</sup>独逸日記』の谷口の皮肉な言葉は、日頃の悪感情と狷介な性格が手伝い、嫉妬と対抗心に燃えたものでした。



しかも谷口は、日本公使館付武官、留学生取締役、<sup>(註9)</sup>福島安正大尉に女性を世話したことがあり、<sup>(註10)</sup>石黒にも、後に忘れ難くなる女性、蒼山を世話して、信用を得ていると自負していました。これを裏付けるように（21年）1月4日付森篤次郎の『家書』があります。

貴様ガエライ事ヲスルガ、イクラ功業ガアッテモ、オレガ〇〇ヲ世話シ  
タニ及ブ者カ。石君ニ対シテノ手柄ハ大ナルゾ、ソノ甘心ヲ得テオルゾ、  
貴様ガ功ガアルトテ、オレヲ馬鹿ニスルナ。谷口ハ何モデキント云ナ、  
スデニ縮テオレヲ懼テ居ラネバ茲ニハ居ラレンゾ、オレノ氣嫌ヲ取損ト  
宿尻ゾ。

兄林太郎が寄越した第46報という手紙に、弟篤次郎が一部をなぞりながらひたすら同情と共感とをもって返事としています。

学生時代から気の合わなかった森と谷口は、ベルリンでも折合わず、森は谷口から非難と中傷を蒙る気まずい仲でしたが、石黒は2人をうまく<sup>(註11)</sup>幸領してゆきました。

あらたな石黒関係資料や『家書』を総合しますと、石黒の渡欧をきっかけにした石黒家と森家とは、留守を預る者が手土産をさげた交流を始める、父親森静男が、石黒宛の時候挨拶を出すなど、目立たぬ家族の支援で、ベルリンの森を勇気づけ、石黒の心証をよくした<sup>きま</sup>様子が窺えます。

## 2. 森の隊附勤務の真相

『独逸日記』20年11月14日、夜、森は石黒を訪ねると橋本の意向をきかされ、隊附医官の勤務をとるよう指示されました。軍の命令は絶対です。だから直ちに承諾しました。しかし、森はその頃、極めて複雑な心境にありました。後に実証しますが、注目すべき新しい事実をみます。

ところで、一般には小池正直から森宛の手紙があり、谷口が森を遠ざけて自分が専ら石黒の補佐役になり、その眷顧を独占したいとする陰謀<sup>(註12)</sup>があったとする<sup>(註13)</sup>見解があります。新しい資料で真相に関する異論を問いたいのです。第1は、「石黒文庫」にみる、（20年）5月8日、小池正直が提案した『軍医

制度意見』であり、第2は、『在独通信』、(20年)8月27日付第15回信にみる、プロシャ陸軍軍医局長、軍医監、コーレルの勧告をめぐる問題です。

第1の『軍医制度意見』は、小池正直が、石黒の日本出發<sup>にっぽん</sup>わずか20日前に直接手渡した8条にわたる長文の改革案です。冒頭の言葉からも、如何に大きな期待をかけて改革案実現を献策したか、熱意のほどがわかります。

(別紙 2ノ1)

もっとも、石黒は、18年1月の陸軍軍医学会で、「外国医政上の演説」をおこなっており、小池が、この発想を念頭に置き、改革案上申に及んだことはもちろんです。

(別紙 2ノ2)

ベルリンの石黒は、ドイツ陸軍に対してさまざまな<sup>もくろみ</sup>目論見を手がけましたが、中でも小池が留学生に衛生事務を習得させようと提案した『軍医制度意見』は、石黒の意図した外国軍隊における隊附勤務の実現に力強い支えとなったに違いありません。

第2に、コーレル勧告をめぐる問題です。『独逸日記』には8月5日、「石氏と陸軍省医務局に至る。コオレル、シャイベと公事を談ず。谷口も亦与る。」とありますが、石黒とコーレルの初対面は、『在独通信』7月25日付、第11回信の「本日初めてコーレル氏に面会し」の記事に始まります。ベルリンに着いて7日目、森の記録より10日も早い会見です。日本陸軍医務局を代表して訪問した石黒にとって、コーレルはドイツ陸軍医務局を代表する当事者です。当初、橋本の親書を呈した時も、懇ろな<sup>よしみ</sup>好誼に満ちていますがしかし、石黒はドイツ陸軍に足を踏み入れる、難しさに、いささか当惑を感じました。

さて、8月27日付第15回信は<sup>きき</sup>前にも述べたようにコーレルの勧告で谷口と森を出張させたいと書きました。コーレルの勧告は石黒が断ち切れない強いものでした。それは、3カ月後の私信、つまり秘密文書として発信した11月16日付第29回信であきらかです。

(別紙 2ノ3)

秘信とはいいいながら、コーレル勧告のように、口外を憚る程度で秘密にするほど重要ともおもわれません。たとえば、森本人には伝えて欲しくないドイツ陸軍、隊附医官の勤務の実際、勤務は意外に楽なようでした。森を出張させたため予算超過で石黒の会計は赤字である。森の給与を谷口なみに増額すべきである。日本軍人と西洋婦人との結婚問題などです。

石黒には、派遣した日本陸軍の留学生に、国情の違うドイツ陸軍で、隊附勤務を体験させたい意図がありましたから、コーレルの勧告を無下に断れません。勧告の対象は、ベルリン大学ロベルト・コッホ教授のもとで実験研究に励んでいる森林太郎です。森はドイツ陸軍や医学者間で、卓抜な語学力と豊富な知識、実験医学の業績と技倆を認められていました。谷口が選ばれるなら当然、森が選ばれてよい実力を備えているとコーレルも理解していたでしょう。コーレルの強い勧告に、たじろぎをみせた石黒は、来独早々で、ドイツで積んだ森の実力を知らな過ぎました。

ところで、陸軍省宛『在独通信』の大半は橋本総監宛ですが、直属の部下、石坂惟寛（次長）や足立寛（課長）宛もあり、石黒はこの2人を橋本・石黒ラインのパイプ役として専務連絡にあたらせました。

やがてドイツ陸軍隊附医官として、森を留学生のチャンピオンに選んだ石黒は、日本陸軍の体面を保つために石坂と足立をあしらいました。具体的には11月14日夜、石黒を訪れた森に示した「足立軍医正の書」が、即ちそれです。「橋本軍医総監の意を承くる者なり。」「然らずば陸軍省に対して体面悪しからん」と、陸軍の立場を貫く名目で、石黒は足立らを仲立ちに配しました。ですから、森に対する指示が、谷口の陰謀で発せられたとは考えられません。別紙は橋本・石黒ラインの感謝の文面です。

（別紙 2ノ4）

ここで、森の隊附勤務に関連し、複雑な心境に触れた新しい資料を紹介します。それは、さきにも引いた1月4日付森篤次郎の『家書』の一節です。

家兄若シ容レラズバ辞表ヲ出スベシ。（中略）……富塚ハ権謀家ナリ、

曰ク、余ハ法科ヲ卒業シ洋行ナシテ判事ニ上リ、名望ヲ得テ国事犯ニ付キ、寛刑ヲナシ、上官ノ叱責ヲ受ケ、職ヲ辞シ、民権家トナリテ事ヲナスト、……実ニ巧方便ナリ。名ヲ得ルハ官ニテ、事ヲ成スハ民間ナリ。若シ家兄職ヲ辞サバ僥倖ナル位ナリ。書ヲ著シ、学士会院、講演会ノ演説ニ適セリ。医学会ニハ学説ヲ出スベシ、医界ニハ議論ヲ為ス可シ、其外、文章、詩歌、法律、政治、戈ニ任シテソノカラ伸ブ可シ、橋氏ノ奸、谷口ノ悪ハ一部ノ小説ニ編ム可シ、(末広ノ花間鷺ハ自身ノ口記ナリ)敦レニシテモスデニ四年洋行シ、コノ名望ヲ博スレバ天下ニ恐ルル敵ナシ。これは弟篤次郎が兄林太郎に辞職をすすめた新しい事実です。一般に、森の生涯で最悪な時代は、格下げにより小倉へ転じたことですが、その時、辞職を決意した話は余りにも有名です。

しかるに早くもベルリン時代兄が弟のすすめとはいえ、一時的でも辞職を考えた新しい事実は、重要です。北里柴三郎がもたらした武島務<sup>(註15)</sup>の免職事件が他人事<sup>ひとごと</sup>ではなかったこと、小説『舞姫』の主人公太田豊太郎の辞職が森鷗外の想像の産物ではなかったこと、つまりは、水脈を一つにしていることになるからです。

ところで、森の隊附勤務はベルリン時代の暗鬱に<sup>(註16)</sup>追討ちをかけたとする説があります。(21年)2月9日付、篤次郎の『家書』は、賀古と小池が橋本に質した真意をすぐさま森に伝えました。これを知った森は、日頃の橋本に対する不信感を払拭し、もやもやした不満も解消したでしょう。3月10日以後の「隊務日記」がのべているように精励恪勤です。後に、ドイツ陸軍から褒められています。従って、隊附医官の勤務に、追討ちをかけたとはみられません。

なお、森が投じた大和会批判や「独文ノート」に関連の話題は別な機会に譲らせていただきます。

### 3. 蒼山からみた森の愛人例之人

ベルリンに於ける石黒の私生活は、訳知りと佳人の関係で、『石黒日乗』に

よれば、11カ月間に、75回の情事を数えます。数日後、蒼山と別れねばならない21年6月26日、「夜9時、蒼山氏ヲ訪フ」としたためた日記は、「別杯ノ約アレバナリ」と、惜別の情もだしがたく馴れ初めから書いている回想記録です。

(別紙 3ノ1 A)

ベルリン滞在1カ月、早くも佳人にめぐりあい心を和ませました。蒼山は実名を何といい、何歳か知る由もありませんが、まじわりを重ねるたびに女性像をあかしています。

(別紙 3ノ1 B<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>、B<sub>3</sub>、B<sub>4</sub>)

清らかで、さっぱりした、おとなしくて、すなおな蒼山に、いつしか魅了されました。幼少の頃、両親を失っている石黒は、母親に先出たれてその顔も知らず、継母に養われて育った蒼山が、貧しさから抜け出すため、やむなく春をひさぐ身に同情を寄せました。それは石黒がベルリンという異境万里の地にあってひとり蒼山だけに示した理解でしょうか。

石黒と蒼山との会話に時々森の愛人がのほりました。愛人を例之人と石黒は呼びました。『石黒日乗』では、帰国後の10月7日のひとことですが、例之人とは、森の帰国のすぐ後を追って、ドイツ船で来日し、滞在、34日間で戻って行った問題の女性です。

(別紙 3ノ1 C)

『独逸日記』は、小倉時代<sup>(注17)</sup>に改作して、この問題の女性を日記から完全に抹殺し、疑念をはらんだ大幅な欠落をみるばかりです。

(別紙 3ノ2)

しかし、『石黒日乗』からは、蒼山を通じて例之人が、臆気に透けて見えて来ます。目ぼしい記事を挙げてみます。まず、2月26日、日曜日、晴。

(別紙 3ノ1 D)

「毎週一回接話ス」とは、『独逸日記』によれば、4カ月前の10月30日。フランス語教師をベックが、日本語教師を森が受持ち、相互に始めた交換教授

です。いまでも毎週日曜日に続けていることを蒼山はバックからききました。森と親しいバックも蒼山の馴染みでした。

そういえば、帰国途中の石黒宛、別れたあとの蒼山の様子を伝えた人がいます。ベルリン滞在中の解剖学者田口和美教授で、蒼山は来年の(明治22年)パリ万国博覧会見物のため、フランス語を習い始めたと知らせていますが、これを読んで石黒は、後髪を引かれる程の思いをとどめています。

「同氏」とは蒼山のこと、「同人」とは森のこと。森とバックの語学が話題になりました。「又森ノ事ニ及ブ」とあるからは、「又」以前に、「森ノ事」が話題になっていた訳です。「又」以前とは、物理的にも心理的にも程遠くない情事。たわいもない話題なので石黒は日記に留めませんでした。蒼山が語る「森ノ事」とは、蒼山にも耳寄りで身近かな人の話なら、石黒にとっても共通な話でなくてはなりません。

その後、「森ノ事」はしばらく途絶えて、6月26日、火曜日、晴。例の「別杯ノ約」で蒼山を訪れた石黒は日記に意味深長な1行をとどめています。懇ろな石黒と蒼山にとっても森の事態は切迫して徒事ではなかったのでしょうか。なぜ石黒が「森ノ事」を「多木子」と変名で呼ぶのか推理はともかく例之人との深まる関係は頗る懸念され、1行に凝縮した「昨今中情如何ゾヤ」とは、見方によっては甚だ深刻にさえ感じられます。

(別紙 3ノ1 E)

7月3日、帰国準備の森は、石黒とレストラン・テッヘルで最後の中食をしながら再び「前途ヲ約」しました。再びとは6月8日「森来ル、前途ノ事ヲ談ズ。」とあり、森は、石黒に帰国のお供を申し入っていたのです。この時、石黒が森を嫌っていたら断ることもできました。ところが、森を呼び寄せて再び「前途ヲ約」した石黒には、それなりの理由が挙げられます。何よりも在独1年間公私にわたり協力してくれた。森がいれば安心して帰国できる。蒼山を介して知った愛人例之人の話は、青春の当然な成りゆきである。帰国に煩わされない。あえていうなら、多分に思いやる心で受け止められる。そ

う考えるのが妥当でしょう。そこで、石黒は森と帰国をともにしました。

実際に在独中の石黒は、女性問題に対して無理解ではありませんでした。たとえば、8月3日付の第12回信には、医学留学生に応えた「独乙人ヲ妻ニ持ツコトニツイテノ相談」の報告があり、また、11月16日付、第29回信には、さらに「花島騎兵中尉の西洋婦人との結婚問題」に関する見解があります。

(別紙 3ノ3)

いよいよ7月5日、帰国の旅立ちです。石黒と森とは、夜9時2分、ベルリン駅発の列車で出発しました。アムステルダムへ向う車中で、真夜中の2時、森は初めて愛人の話を打ちあけました。

(別紙 3ノ1 F)

石黒は、先程、ベルリン駅頭で約束の白バラをかざした蒼山との別れ難さを思い浮べ、初体験の森が残してきた例之人を痛ましく感じました。解決の糸目もつかず帰国する苦悶のさまをみて傍目<sup>はため</sup>にも慰める言葉に窮したと解します。暗鬱の根源はこの女性問題でしょう。

やがて、ブレーメンから例之人が追ってくる。森はベルリンの暗鬱を抱いたまま還東の客となりました。

(別紙 3ノ1 G)

おわりに、

欠落の多い『独逸日記』を、<sup>(註18)</sup>「鷗外のドイツ留學生活最上の記録」であるとし、「史料価値」を認めた解説を最近みかけます。しかし試みに、石黒関係資料と『家書』をあげて考察しても、若き日の森鷗外像は結びません。もっと総合的な視点から実証すべきではないでしょうか。

この発表にあたり貴重なご助言をくださいました長谷川泉、稲垣達郎、渋谷驍、米山寅太郎、神田孝夫の諸先生には、厚くお礼を申し上げます。また、資料提供くださった大鳥蘭三郎先生と、石黒孝次郎氏をはじめ皆さまには深く感謝いたします。ご清聴を有難うございました。

別紙 序ノ1

森鷗外ドイツ留学期間概略

年齢	年 月 日 年 月 日	場 所	滞在日数	備 考
23歳	明治17・10・12～17・10・22	ベルリン	10日	・諸先輩の指示を受く
	10・22～18・10・11	ライプツヒ	12ヵ月	・ホフマン
24歳	18・10・11～19・3・7	ドレスデン	5ヵ月	・ロオト
25歳	19・3・7～20・4・15	ミュンヘン	1年2ヵ月	・ベッテンコオフェル、
26歳	20・4・15～21・7・5	ベルリン	1年3ヵ月	・コッホ、隊附勤務、

石黒忠恵ドイツ視察期間概略

42歳	明治20・7・17	ベルリン	12ヵ月	・石黒と森とは一諸に帰国 7・5出発～9・8横浜着
43歳	～21・7・5			

別紙 1ノ1、1ノ2

『家書』現存一覧

森鷗外記念館所蔵（記念室遺品目録より）

	森 静 男	通	森 篤次郎	通	(小金井)喜美子	通
明治17	9・4～12・20	2	12・20～月日未詳	2		0
18	1・1～12・27	22	1・1～月日未詳	24	1・25～12・未詳	22
19	1・5～6・29	11	3・2～月日未詳	9	1・初旬～月日未詳	9
小計		35		37		31

日本近代文学館所蔵（取材メモより）

19	4・3～12・29	14	3・9～12・29、未詳	17	3・未詳～9・1	3
20	1・6～12・9	22	1・6～12・9、未詳	17	2・28～10・初め	6
21	1・5～5・8	8	1・8～5・9	8	1・初め～3・20ごろ	4
小計		44		42		13
合計		79		79		44

『独逸日記』にみる「家書至る」の回数

・ライプツヒ 13、・ドレスデン 9、・ミュンヘン 15、・ベルリン 16、合計53

別紙 1ノ3、

『東京医事新誌』第384号 明治18・8・8発行、

軍医学会・去る4日の同学会において、谷口謙は西洋赤十字社のことに付て同社の来歴



より昨年橋本軍医総監が歐洲巡遊中、同社より懇篤なる招待をうけ、同會議に出席、日本国も同會に加入し得べきを闡明に進みたることを述べ、同會に加入するには道德、法律、医士の完全とキリスト教を嫌はざる4ヶ条に合格せざる可からざる規則なり。又、同會より日本国加入を乞はれたるを詳細に演述せられたり。また、独逸軍医某氏より贈り来りし赤十字といふ書を訳して述べられ、就中、日本国の同會へ加入し得べきの文明に達したるを外國に知らしめたと、又、亜細亞諸國中、同會議に出席したるは、特に日本国なるは我國の一大名誉といふべし。次に橋本軍医総監は軍医学会の事に付き、歐洲各國の例を引き実を挙げて我軍医学会も彼に譲らざるの隆盛に赴かしめんことを述べられた。会場は肅然として耳を傾け非常の拍手喝采ありて甚だ盛なりき。

別紙 2ノ1、

明治20年5月 小池正直 『軍医制度意見』 「石黒文庫」資料394Gu-4  
次長ノ歐洲行ハ吾党ノ久シク切望セシ所ナリ何トナレハ則チ吾党窃ニ我軍医部改良ノ  
念ヲ懷キ其改良ノ第一着ハ行々今ノ次長ヲ推シテ頭上ニ頂キ次ヒテ他ノ諸件ニ及ント  
スルニ在レハナリ嗚呼次長天資ノ機敏慧眼ト多年ノ親驗躬行トヲ以テ歐洲各國ヲ巡視  
セラル帰朝ノ日改良ノ材料定メテ全腔満ルナラン予ハ今敢テ自カラ揣ラス改良案数候  
ヲ左ニ述テ以テ発軔ニ先ツテ之ヲ次長閣下ニ呈シ帰朝ノ後其教ヲ乞ヒ奉ント欲スルナ  
リ

1. 人ヲ取ルノ道ヲ嚴ニスルコト 略
2. 初任ハ必ス2、3等軍医トナスコト 略
3. 軍医ハ必ス隊附セシムベキコト  
凡ソ軍人ハ戦斗ノ用意ニ飼ヒ置カルモノナリ故ニ軍医ニシテ隊ノ勤務ヲ知ラ  
サルモノハ復タ軍医ニ非ス 故ニ其舶来ト和製タルヲ問ハス又専門ノ何タルヲ  
論セス軍医ニ採用シタル以上ハ少クモ2、3年ハ隊務ニ服セシムヘク又隊務勤務  
ヲ知ラサル軍医ハ決シテ上長官ノ地位ニ進ムヘカラス
4. 陳腐ノ軍医ハ遠慮ナク排除スヘキコト 略
5. 軍医ニ終始刺戟ヲ与フルノ仕組ヲナスコト 略
6. 軍医衛生旅行ヲ始ムルコト 略
7. 外国留学生ニハ主トシテ衛生事務ヲ習ハシムルコト

軍医ノ任務ハ平戦時ノ衛生ヲ最モ重シトス而シテ該事務ハ大学校若クハ「ラボ  
ラトリウム」ニ於テ学ヒ得ルモノニ非ス夫レ陸軍ヨリ海外ニ留学生ヲ出スハ帰朝  
後之ヲ教授スルノ目的ニ非スシテ陸軍各部ノ機関ヲシテ益々円滑ニ運転セシメ戦  
時咄嗟ノ際ニ於テ準備頓整区処即定苛モ軍機ヲ誤ルコト莫シムルニアリ 故ニ軍  
医留学生タル者ニモ主トシテ此等ノ事務ヲ伝習セシメ我軍医部ノ組織ヲ改良スル  
ノ策ヲ立サルヘカラス……予ノ考案ニテハ1年間隊附ト為シテ四季ノ隊務ヲ見

学セシメ其間朝診断ノ景況ヨリ管内ノ衛生諸務ヲ熟察シ行軍舎營野營露營ノ実況ヲ視察シ演習射的等ニハ必ス随行シ其準備ノ模様ヨリ軍紀風紀ノ有様ヲ親驗シ一年ノ後ニハ陸軍病院ニ入り留ル三月是ヨリ更ニ医務局ニ入り又留ルコト三月其間充分ノ觀察ヲ遂ケ然ル後大学ニ入り若クハ大家ノ「ラボラトリウム」ニ於テ軍医必須ノ専門科ヲ修メシムヘシ 但シ少クモ一年半ノ間ハ是非トモ其事務ヲ習ハシムヘシ（某外国人ニ一年ニテ足レリト曰フトイエトモ是ハ自国ノ人ノ自国ノ事ヲ見習フノ考ノミ従フヘカラス）

#### 8. 軍医ヲシテ輕佻ノ風ヲ避ケシムルコト 略

別紙 2ノ2

『東京医事新誌』第359号 明治18・2・14発行

軍医学会、同会は去一月中三回開會ありしが、其第一回には石黒軍医監は軍医は軍を服脱するときは直ちに平医となり得るの識あるも平医の軍医となるは斯く容易なるものに非ず是れ軍医たる者は普通医学の他尚軍陣医学なるものを修めざるあらざるは勿論又外国医政上のこと等種々の事に通ぜざる可らざるものなればなりといふ意にて外国医政上の事を演説せられた。且日本と各国との医士の比較数をも示されし 云々

別紙 2ノ3

「石黒文庫」資料『在独通信』第29回秘信より“コーレル勸告”抜粋

谷口、森兩人をウィンヘ遣シ候て此費目は相渡居候は無拠候へ共是は小生ヲ通弁ニ連候には無之候 何トナレバ通弁には内務省ヨリ北里中浜ノ兩隨行立派ニアレバナリ普国医務局長ノ勸告ニテ不得止ヨリ遣シ候事ニ候此等の事医務局長ノ勸告ニ不隨時は此等軍隊等ニ入ルルニ甚不都合ナレバナリ 云々、

別紙 2ノ4

「石黒文庫」資料『在独通信』第29回秘信より“森の隊附勤務”抜粋

森一等軍医隊附之儀段々御主旨の趣石坂次長并 足立課長を以て御惠鍼之段敬承致候コーレル氏へ相談候処同人被申候には隊附勤務の詳細は先日来貴下御取調被成候事に候なり 云々、

別紙 3ノ1

『石黒日乗』より抜粋“蒼山と例之人”

A 明治21年6月26日 晴 火

九時蒼山ヲ訪フ氏ト別杯ノ約アレバナリ十時車ヲ共ニシテシヤロッテンストラセラウルニ至リ共ニ杯ヲ挙ケ十二時食了リテ車ヲ驅リテチールカルデンヲ經過シ一時其家ニ至ル腹痛ヲ来シ終ニ宿ス離情互ニ話シテ去ル来ル月火兩曜日ノ内ヲ約ス回顧スレバ去年八月十六日雨福島谷口ト共ニ某場ニ至リ初めて此人ヲ知り詩アリ曰  
佛泪何珊殊容新 転使老朽思陽春 一愜万客君休尤 一握手巾価千金

夫ヨリ八月廿日ヲ約シ八月廿日ニ其家ヲ訪フタルヲ最初トシテ此二十一月…其情清楚無比加之温順にして頗る徳アリ氏曰固より客旅ノ友其久シカラサルハ予テ期スル所ナレトモ一年之親交他ノ客ト同シカラサルノ情アルハ盖シ東西一致ナラン 云々

B<sub>1</sub> 21年 2月26日 晴 日

蒼山氏ブランデンホルクストラーセニ住シ一月多キ時ハ七百マルクヲ収入スト云々

B<sub>2</sub> 21年 3月 3日 晴 土

氏早ク母ヲ失キテ顔ヲ不知ト而シテ繼母親切ナラス終ニ余此業ヲ取ルニ至ルト言ワリテ泣然東西其情同シ 云々

B<sub>3</sub> 21年 6月26日 晴 火

希クハ君ノ健康ニシテ本邦ニ安着セラレ内君尊兄ニ逢玉ハンコトヲ且希クハ英京佛都佳人多シ客旅ノ士必ズ之ヲ訪フ必ズ其病ナキモノヲ撰レンコトヲト言アリテ慘然タリ予於此思フ予カ徒ニ此人ニ親シムモ尚此惨愴ノ情アリ 云々

B<sub>4</sub> 21年 7月 5日 曇 木

蒼山ヒソカニ来リテ送ル其家媼ト共ナリ白バラヲ以テ兆トナス車アウステルリシクノ上ヲ過キテ頗ル…情ヲ惹ク 云々

C 21年10月17日 好晴 水

森林太郎来リ本日例之人ヲ船ニ送り届ケタル事ヲ云フ

D 21年 2月26日 晴 日

蒼山氏ヲ訪フ談又森ノ事ニ及ブ同氏曰同人勤勉毎週一回接話スト 云々

E 21年 6月26日 晴 火

彼ノ多木子昨今中情如何ソヤト

F 21年 7月 5日 曇 木

夜二時天微カニ明カナリ。車中森ト其情人ノ事ヲ語り為ニ愴然タリ後互ニ語ナクシテ仮眠ニ入ル

G 21年 7月27日 晴 金

今夕多木子報曰其情人ブレメンヨリ独乙船にて本邦ニ赴キタリトノ報アリタリト云々

別紙 3ノ2

『独逸日記』在ベルリン期間 欠落日数表

明治年	月	日	欠落日数	記事日数	備考
20	4	28	1	12	4・17～
	5	3 4 5 9 10 11 15 16 17 18 19 20 21 22 23 26	16	15	
	6	2 3 5 6 8 9 10 11 13 14 17 18 19 21 22 23 24 25 27 29	20	10	

	7	1	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	20	24	25	29	30	20	11						
	8	1						8	10				14	15		18	21	22	24	25		10	21						
	9				5	6		8	9	10	11	12										8	22						
	10												13	14	15	16	17					5	26						
	11																			29		1	29						
	12	1		4	5		7	8		11	13		16	17			21	22		29		12	19						
21	1			5	6	7				13	14	15				21	22	25	26	27	28	12	19						
	2	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13		19	20	24	25	26	27	28	20		9				
	3	1	2	3	4	5	6	7															7		3	~ 3 • 10			

別紙 3ノ3

「石黒文庫」資料『在独通信』第29回秘信より

“花島騎兵中尉の西洋婦人との結婚問題” 抜粋

花島と申す騎兵中尉当地ヨリ結婚約束致候趣昨日承及申候○両将官(注、在ベルリンの乃木希典少将、川上操六少将のことである)閣下とも御相談ノ上之よしに付安心致候軍医居留学生ノ内求婚者には左件ヲ小生は主張候 其婦人ハ互ノ愛情ハ皇帝陛下ノ至大権モ之ヲ支フルコトヲ不得 然トモ我々西洋求婚ヲ相談スル人には左件ヲ忠告ス

1. 其人教育アルコト日本婦人上等の教育アルモノト比ス可キモノ
2. 健康ノ人
3. 資産アリテ之ヨリ生スル利子其人ノ生活ヲナスニ足ル者
4. 賤劣汚穢ノ名ナキ人
5. 日本皇帝ヲ最上尊者ト思フコトヲ誓言スル人

又、男子モ西洋婦人ヲ婚ル以上ハ左ノ不足ヲ必定ト覚悟スルコト

1. 親子繁類ノ業(注、あるいは楽か)ヲ減スルコト
2. 男尊女卑ノ心ヲ減ス可キコト
3. 十分ノ所得ハ七分ヲ妻ニ費シムルノ覚悟アルコト
4. 妻ニ家ヲ守ラシムルノ念ヲ絶ツコト

注

1. 長谷川 泉「森鷗外論考」正統、明治書院 昭和37・11、42・12

「森鷗外」(写真作家伝記業書2)、明治書院 昭和40・4

「キタ・セクスアリス考」正統、明治書院 昭和43・7、46・12

小堀桂一郎「若き日の森鷗外」東大出版会 昭和44・10

竹盛 天雄 雑誌「文学」岩波書店 昭和50・9、50・12、51・2

「石黒・森のベルリン淹留と懷帰をめぐって～緑の眼と白い薔薇～」(土)・(中)・

(f)

竹盛天雄、小堀桂一郎、磯貝英夫、平川祐弘、三好行雄「森鷗外」(シンポジウム日本文学13)、学生社 昭和52・2

磯貝 英夫「森鷗外～明治20年代を中心に～」明治書院 昭和54・12

磯貝 英夫「森鷗外」(鑑賞日本文学1) 角川書店 昭和56・8

2. 吉野 俊彦「森鷗外私論」毎日新聞社 昭和47・11

『独逸日記』の明暗―「暗」の部 P.78参照

3. “森 鷗外記念会” 東京都文京区千駄木1ノ23ノ4

区立鷗外記念本郷図書館内、森鷗外記念会記念室

電話(828)―2070、2071

“日本近代文学館” 東京都目黒区駒場4ノ3ノ55(駒場公園内)

電話(468)―4181～4184

4. 『独逸日記』岩波決定版「鷗外全集」第35巻 P.124参照

「石黒氏の書到る。曰ふ、軍事を学ばんとて、多く日を費すこと勿れ。宜く普通衛生の一科を専修すべしと。」(明治19年1月3日)

5. 『独逸日記』岩波決定版「鷗外全集」第35巻 P.167参照

「中浜東一郎の電報民願府より至る。石氏の其地を発するを報ずるなり。停車場に至りて迎ふ。」(明治20年7月17日)

6. “不円文庫” 東京都港区芝公園1ノ8ノ20、クレセント・ハウス内

ギャラリー三日月 取締役社長 石黒孝次郎氏

電話(436)―3216

“石黒文庫” 東京都新宿区信濃町35

慶応義塾大学医学情報センター(北里記念医学図書館)

電話(353)―1211代表(内線2750―2758)

7. 『独逸日記』岩波決定版「鷗外全集」第35巻 P.151参照

(明治19年10月25日)「谷口謙 伯靈に到ると報ず。その受くる所の学費は余の額に比すれば頗る多しとぞ。」

8. 『独逸日記』岩波決定版「鷗外全集」第35巻 P.172～P.175参照

(明治20年9月27日)「谷口醉中余に謂て曰く。今回の会君の盡力多きに居る。僕力の君に及ばざるを知る。然れども、僕微りせば誰か能く石黒の為に衽席の周旋を為さんと。」

9. 『独逸日記』岩波決定版「鷗外全集」第35巻 P.166参照

(明治20年8月26日)「夜 谷口を訪ふ。谷口曰く、僕は留学生取締と交際親密なり。既に渠の為に一美人を媒すと。」

10. 『石黒日乗』巻之3 別紙資料3ノ1 “蒼山と例之人” 参照

「回顧スレバ去年 8 月 16 日 雨 福島 谷口ト共ニ某場ニ至リ初めて此人ヲ知り 云々」  
(明治 21 年 6 月 26 日)

11. 雑誌「文学」岩波書店 昭和 50 年 9 月 第 43 卷第 9 号 P. 84 参照

竹盛天雄「石黒・森のベルリン淹留と懷帰をめぐって」(上)～緑の眼と白い薔薇～

「シャイベの講義に谷口も森と一緒に通訳として同席したように、石黒はこの若い 2 人の部下を連れて、陸軍省への出頭や衛生部や病院などの視察にまわっている。(中略) いずれにしても、石黒はこの気質の違った 2 人の部下を宰領しながら、ベルリン淹留生活に入って行ったわけである。」

12. 小堀桂一郎「若き日の森鷗外」東大出版会 昭和 44・10

3 つの創作『舞姫』より P. 489～P. 490 参照

「明治 20 年 11 月、鷗外は石黒忠恵から橋本綱常医務局長の意向をきかされた。曰くく森林太郎の洋行は事務取調を兼ね。其帰朝の前必ず一たび隊附医官の務を取らしむべし。然らずば陸軍省に対して体面悪しからん」というのである。森の場合元来は「独逸国衛生制度調査及衛生学専攻」が表向きの留学目的であったが、自分では研究に専念する純学術的な留学というつもりでいた。衛生制度取調べのことは本国から照会があった場合、プロイセン陸軍一等軍医ケルティングに問合せその答を送っておけば十分であろうという現地上司の了解もついていた。当地の現地上司とは他ならぬ橋本綱常であった。その橋本が 3 年前の了承事項を覆えすようなことを言ってきたので鷗外は不審であった。そして小池正直の書簡による示唆もあり、自分の心当たりもあり、今度の処置は谷口謙の陰謀ではないかと気づいた。学究肌の鷗外にとって隊附勤務は迷惑であったが上官の命令である以上は林太郎は唯だ命令を聞くのみ。意見を陳ず可きに非ず。謹みて諾す」と答え、翌年 3 月からプロイセン軍に加入して属僚的な隊附医官の仕事についた。」

13. 雑誌「文学」岩波書店 昭和 50 年 12 月 第 43 卷第 12 号 P. 105～106 参照

竹盛天雄「石黒・森のベルリン淹留と懷帰をめぐって」(中)～緑の眼と白い薔薇～

「11 月 14 日のこと、石黒日記によれば、石黒は福島大尉を訪い、「森等ノ事ヲ談」じている。その夜、谷口と森が石黒を訪ね、石黒は森に小池正直からの書状を手渡した。『独逸日記』の同日の記事は、この夜の石黒とのやりとりを再現しており、今日まで多くの人々によって注目されて来たものである。ここで留意すべきことは、石黒日記が証しているように、森がこの命令を聞いたのは、石黒との一対一の席ではなかったという点である。小池書簡で暴露されるごとく、森を隊附勤務にまわし、その後の石黒の補佐役を自分で専有しようとしたのが、『谷口の要求』であったとすれば、その張本人の谷口が同席して森の『林太郎は唯だ命令を聞くのみ。意見を陳ず可きに非ず。謹みて諾す。』といううけこたえを聞いていたのに注意したい。森にすれば言い分がなくなかった。」

14. 雑誌「文学」岩波書店 昭和 50 年 12 月 第 43 卷第 12 号 P. 106 参照

竹盛天雄「石黒・森のベルリン淹留と帰郷をめぐる」(中)～緑の眼と白い薔薇～  
「森一等軍医という選ばれし人物と、橋本、石黒ラインによるドイツ衛生部との密月関係ゆきにしては、だんだん嚴重になりはじめた外国軍人の隊附勤務の許可を獲得することが困難だったことも考えねばならない。森は帝国日本衛生部のチャンピオンとして選抜されたのである。そして十二分にその任務を果たした。(中略)近衛歩兵第二連隊長陸軍軍医正ケーレルから日本陸軍大臣に呈した『証憑』における激賞の文字によってもそれは立証されているのだ。」

15. 『独逸日記』岩波決定版「鷗外全集」第35巻 P.166参照

(明治20年6月30日)「此日北里曰く。武島務帰朝の命を受く。子之を知るや。曰曾て聞けり。曰島田輩の説く所に依れば、福島谷口の讒を容れて此命を下しし者の若し。君の意何如。」

16. 「鷗外選集」岩波書店 第21巻 昭和55年7月

小堀桂一郎・解説～「鷗外の日記」～ P.365参照

「彼のこの憂鬱に追うちをかけるかの如くに、鷗外は官命によってプロイセン近衛歩兵第2連隊に隊附医官として入隊し、軍医業務の実習に従ふこととなった。『隊務日記』を見れば鷗外が極めて精励篤実にこの任務を果たし、かつこの記録報告を以て日本陸軍の兵営内での医務運用に対して貢献するところ少くなかった次第は素人眼にも推察できるのであるが、しかしこの実務は鷗外自身にとっては甚だ歓迎すべからざるものであった。」

17. 長谷川 泉「森鷗外論考」明治書院 昭和37年11月

「在徳記」から『独逸日記』への変貌 P.139～P.163参照。

18. 「鷗外選集」岩波書店 第21巻 昭和55年7月

小堀桂一郎・解説～「鷗外の日記」～ P.359参照

「この日記が世間の読者大衆の眼を意識した補訂稿である、つまり一種の「作品」であることを認るとしても、これが正味三年半に亘る鷗外のドイツ留學生活の最上の記録であるといふ、その史料価値にそれほど欠損が生ずるわけではない。省略された部分に、留學中の彼の私生活に関する微妙な秘事や真相が含まれてゐたであらうことは勿論推測されるのであるが、筆者鷗外自身がそれを伏せた以上は、我々がそれとをやかく穿鑿すべきではあるまい。我々後世の読者としては現存の『独逸日記』をそのあるがままに受け取り、かつ読み解くより以上のことはできないのである。」

## 討議要旨

中井善幸氏から、鷗外の独逸滞在のうち、ベルリンにいた1年は当初計画

を1年延期したものだが、その1年の滞在費等の問題、またドレスデン行きについての動機などについて詳細を識っていれば教示願いたいとのコメントがあり、発表者から、ベルリン滞在費は軍から出ていたことは確かであると思う、石黒日記などにもその経緯が若干記されている。また期間延長のことについては、はっきりしたことはわかっていないが、当時弟から鷗外にあてた書簡などによってその間の事情がわずかながらわかるとの発表があった。

ジアネス・バードマン氏から、ドイツ滞在の前半の3年間、鷗外は社交的に明るく過しているにもかかわらず、最後の1年は何か暗鬱な影があるように発表されたが、その1年に何か専門的な責任ある仕事が大幅に加わってきたことも理由の一つとなっているのではないかとの質問があり、発表者から、石黒の来独によって、公私にわたって、彼に緊張した形で仕えなければならなかったことがやはり主要因だったと思う、との返答があった。

長谷川座長より、ドイツ最後の1年のことにふれて『舞姫』のモデル問題についても今後追求されるであろうとのコメントがあった。